

---

# 傀儡と傀儡子

馬耳東風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

傀儡と傀儡子

### 【Nコード】

N7417X

### 【作者名】

馬耳東風

### 【あらすじ】

日本の歴史上、最も劇的な逆転劇となった本能寺の変。明智光秀を突き動かしたのは何なのか。何故、信長は光秀を読みきれなかったのか。そして、三日天下と言われたあっけない光秀の最期の謎は、本能寺の変を驚天動地の角度で描く、歴史のIF。

## 時は今

天正十年六月二日未明。暗闇の中、京の桂川に差し掛かる一団があった。彼らを指揮するのは、明智日向守光秀。織田信長を頂点とする、織田家で最も権勢を誇り、信長の信頼を勝ち得た男である。彼は、信長の命で、中国攻めを行う羽柴筑前守秀吉の援軍に向かう道中であつた。今、この瞬間までは……。

軍を率いる光秀は、馬上で体を揺らしながら、暗い夜道の先を見据えている。家臣の者達は、光秀の様子を見て、

「殿は、今も頭の中で、中国攻めでの立ち振る舞いを考えておられるのだな」

と、思っていた。お館様、つまり信長の今度の命令は、中国地方に展開し、強大な勢力を持つ毛利を攻める羽柴筑前守秀吉の支援である。ほぼ勝ち戦でありながら援軍を求めるなど、秀吉の考えそんなことだと言うことは家臣たちでもわかることだった。

秀吉は、光秀と同格とも言える勢力を持つ出世頭である。彼は出自は百姓と言っているが、本当の身分すら定かではないところから、城持ち大名にまで出世する彼の才覚は並みではないどころか常識外れであつた。彼の才覚は、人の心を察することの巧さにある。周りにいる人間すべての考えを察し、何を望むか、何を欲するかを嗅ぎ取り、それを実現することで手柄と信頼を獲得し、のし上がってきた。その手腕は、光秀ですら、

「あの人たらしには、頭が下がる。あやつの才覚は、城だけでなく、自分より格が上の者すら引き込んで手中に入れてしまう不思議なものだ。そして、あの眼の輝きを見たものは皆引き込まれる。このわしですらな」

と、恐れ入ったと言う表情で苦笑いしながら家臣に話すほどだった。

今度の援軍要請も、あまりに大きな手柄を独占すると、成り上がり者の自分が家臣団の間で図抜けることで反感を買っばかりか、絶対的な支配を好む信長の感に触ると言っしたたかな読みがあった。それを知っている家臣団は、半ば白けていると同時に、勝ち戦に乘じて領地を拡大することを考えていた。恐らく殿もまた同じことを考えていると信じ切っていた。秀吉に負けぬ力量と才覚があるからこそ、織田家家臣の中で信頼と地位を勝ち得てきたのだ。そして、それくらいの読みとしたたかさはもちあわせているのが明智光秀なのだ。

光秀に率いられた軍勢は深夜の行軍を続けながら、街道を進んでいた。このまま順調に行軍を続ければ、羽柴軍に合流するのも遅くならず済む。そのような中で進んでいる時だった。

馬に乗って行軍していた光秀が、突然手綱を引いて馬を止め、「皆の者、止まれ」

と、静かに命令を下した。主の命は絶対だ。家臣たちは、後続の兵に立ち止まるよう命令を伝えていく。真意を理解しかねた重臣の明智秀満が、停止命令を出した光秀にどのような理由なのか問いかけてみた。

「殿。何故このような所で馬を止めるのです。夜間の移動ゆえ、早めに休息をとる場所に辿り着かねば、羽柴殿との合流が遅れます」

秀満と共に、同じく明智家の重臣である斎藤利光もまた、光秀の命令に疑問を持っていた。

「殿、早く馬を進めませんか、足輕達にも動揺が広がります。いかががされたのですか」

二人の問いに、光秀は一向に応えようとせず、見ようもしない。そして、新月の空を見上げると、深いため息について二人の方を振り返った。そこにはいつもの明智光秀の顔があるのだが、どこか表

情や目つきが本来の彼と違うことに、長年仕えた家臣も気がつけなかった。じつと二人を見つめた光秀は、ゆつくりと口を開き、言葉を発した。静かだが、確かな口調で。

「そなたら、わしのために死ぬ覚悟はあるか」

光秀の思いもかけぬ問いに、利光や秀満は驚きはしたが、それは常日頃から心に決めてあることなので、答えに躊躇はなく、もちろんだという答えを返した。それを聞いた光秀は力なく笑うと、

「そうか。お主たちも、そしてわしに率いられるこの軍の者は、わしに、この明智日向守光秀に命を預けられる、いや、くれるてやると思うのだな。……、すまぬな」

と、慈しみ深い表情を見せた。何故、このような時にこのようなことを殿は言うのか、さっぱり理解できない家臣は、あっけに取られていた。そんな彼らに、光秀は確かな口調で命令を下した。

「これより我らは東に向かう」

家臣たちは驚愕した。一刻も早く西の中国に向かわなければいけない時に、何ゆえに京に軍を向けな変えればならないのか。軍が遅れ、さらに京の都に我々がいれば、主君信長公は何と思われるか。信長公は何と思われるか……。信長……。利光と秀満の脳裏に、恐ろしい考えが浮かんだ。東に向かえば京都。そこには信長公がいる。宿泊するのは本能寺。堀や防壁などを築かれているとはいえ、ほぼ丸腰に近い状態の手勢。彼らは、光秀の考えていることを理解しつつあった。

光秀は彼らの顔を一瞥し、彼らが口にしなくてもその意を察し、自分の言葉を待っていることを理解した。ゆつくりとうなずくと彼は、静かに、はっきりとした口調で宣言した。

「我らはこれより東に向かい、京へ戻る。足軽にはまだ伝えるでない。彼らは、それほど忠義が強くない故、怖気づく者も出るであろ

う。事の次第は、その時までお主達と一部の者以外に知らせるな。敵は、敵は本能寺にあり」

予想していたとはいえ、あまりにも恐ろしい主君の発言に、家臣は言葉を詰まらせ、顔面は蒼白になっていた。信長の苛烈さは度を超えており、この事が知られる様なことになったり、事が失敗した後は死より恐ろしい仕打ちが待っていることは、織田家に仕える明智の家臣であれば恐怖を伴ってわかっていることだった。胆冷やして思考停止に陥っている家臣を見つめながら、光秀はあくまで冷静に、淡々と己の心の内を打ち明けていく。その顔には表情はなく、まるで能面が口を利用しているようである。

「お主たちが肝を冷やすのも無理はない。お館様は、自分に手向かう者や牙をむく者に対しては、一切の情けはかけず、鬼となってこれらを征伐する。神仏を恐れぬあのお方にとつて、人の道を外れることに後ろめたさはない。白か黒か、その二つのみ。灰色をこの世に認めぬのだ。故に、我らの行いは決して許さず、怒髪天を突きながら襲いかかるであろう」

光秀は、淡々と信長の恐ろしさを口にしていく。それは家臣たちもわかつていいる事ではあるが、光秀落ち着いて口にするほど、恐怖に体が固まるしかなかった。利光は無駄かもしれないとも、光秀に今一度そこに考えを改めてもらうことを願う気持ちで、真意を問いたした。まさに、地獄への分かれ道に達っている心境だった。

「それほどまでにお館様の恐ろしさをわかっていながら、何故にこのような謀反を企てるのですか」

はつきりと光秀の考えを謀反と断じた家臣に対し、光秀は怒るでもなくただ淡々と答えるのみであった。その表情は、能面のように無表情で、人の物と思えなかった。

「これは謀反にあらず。お館様は、いつのころからか人の道を外れ、

人であることをやめてしまわれた。神仏をないがしろにし、城の石垣に墓石を使う始末。僧侶であろうと一切容赦せず、寺を焼き払う所業。一向宗とあらば、女子供と容赦はせず、平気で屍の山を築く。挙句の果てには、朝廷に対しても恭順の意を捨て、帝に対してもはや敬意を持つては居らぬ。朝廷の臣下ではないものが兵力を誇示するがため、京で馬揃えを行うなど、危険極まりない恫喝である。お館様は、第六天魔王などのたもつておる。それはその所業を見れば、わしも同意する。だが、第六天魔王は天上にあるからこそ、魔王たりえる。この世における魔王など、鬼畜の如きもの。我らは、織田信長と言ふ人の体に巢食う魔物を天に帰す者と思え。謀反にあらず。これは天が命ずるもの。お館様の魂を天に送るとともに、魔からこの世から救うものと思え」

光秀の圧倒的な演説は、家臣たちの恐怖を取り払い、魂をも引き寄せるほどの力を持っていた。謀反の原因など、古今東西に溢れかえっている。それは、謀反の原因を相手を貶め、己の正義を作るための物。しかし、光秀の言葉は、あまりに荒唐無稽でありながら、信長の非道を的確に指摘し、誰もが言いだせず、心の奥底に押しこめていたものを代弁していた。忠義と共に存在する恐怖支配への不満。それを光秀は的確に言葉にし、また謀反ではなく、あまりにも人の道を働く外道と言つてもいい信長の行為を止めると言う、恨みではなく、ある意味最後の信長への忠義すら感じさせるものであった。あの信長に、今の行動を止めさせるには、もはや死しかない。主君である光秀の思いを受け止め、これから自分達の起こす行動に整合性を求めるには、この考えしかなかった。時はもうない。恐怖支配から逃れるには、今夜を置いて好機はない。日頃から、心の片隅にあつた信長への懐疑心が加わり、家臣達はついに決断した。「わかり申した。これが野望にあらず、真に殿の先ほどの言葉道理だとするなら、我らの命、殿に差し上げましょう」

家臣の決断を聞き届けた光秀は、わずかに頭を下げ、その心意気に感謝の意思を伝えた。主が頭を下げるなど、ありえない事であった。

「お主たちの決意、感謝するぞ。今宵は新月、闇にまぎれて行動するにはまたとない。見よ、天も我らに味方しておる。夜が明けぬうちに、本能寺を包囲せよ。この数で囲み攻めれば、必ずやうまくいくであろう」

「はっ」

家臣たちは、後続の部隊に指令を飛ばしに馬を走らせた。もう後戻りはできない。本能寺へ向けて、一本道を行く行軍が始まった。

その時、光秀の顔を見る者は誰もいなかった。もしも、一人でも彼の顔を見ていれば、歴史は大きく変わっていただろう。馬の腹を蹴り、自らも移動を始めた光秀の瞳が、一瞬だけ銀色に輝いた。そして、その口から彼の声であるが、その声の主が他の誰かの様な言葉が口から洩れていたが、一人としてその声が入る者はいなかった。

「明智殿、すまぬ。だが、この好機を逃すわけにはいかぬのだ。今しばらく、この命を貸して下され……」

## 是非に及ばず

明智軍は、それまでとは違つゝ調で移動を開始した。新月の暗闇を味方につけるには、夜の内に異動を完了し、今日に入らなければならぬ。それが叶えば、悟られ巢に本能寺を包囲できる。寺とは言え、堀などを巡らせた城塞の構造を持つ本能寺だ、数が多いとはいえ、それを決定的なものにするには、完全包囲を完成させ、相手の防御を無に帰さなければならぬ。それが完了して、初めてこの作戦は成功する。京には信長だけではなく、嫡男の信忠もいる。最大の目標は信長なれど、信忠に勘付かれると好機はしぼんでしまう。何としても、電光石火の勢いで本能寺を包囲することが必要であった。

「秀満、足輕どもには、何と命令が行き渡っている」

「さすがに信長公を討つなどと申せば、動揺が走りまする故、相手は徳川殿と伝えております。何しろ、この軍には織田家の兵も居ります故」

「なかなかやるの。徳川殿は恭順はしているが、あくまで大名。我らと違い一家臣ではない。野心はあつて当然であるがため、武田と結ぶという話もあつたほどだ。さらに嫡男と正室をお館様の命で死に至らしめている。よく耐えているものだともつぱらの噂だ。内心では恨みを抱いていても不思議ではない徳川殿を討てとお館様が命じて、むしろそれは当然の成り行きとも言える。徳川殿も、今は丸腰同然だからな」

「ですが、本能寺に近づきますと、さすがに感づくでしょう。間際になって騒がねばよいですが」

「秀満、お前も心の内では臆しているのであらう。だがな、人と言うものは追い込まれると不思議な考えを起こす。道理ではない、獣の如き習性で己が生き残る道を選ぶ。獣の感と言うものは、忠義や理屈を超えておる。故に人は、瀬戸際ではその習性に従い、道を選ぶ。この手勢で本能寺に向かえば、己が生き残る道は、頭で考えなくともわかる。丸腰同然の本能寺に駆け込むか、我らと共に本能寺を囲むか。生きるか死ぬかの瀬戸際にいる足軽は、なおのこと獣に近づき、その感性が示す方に向く。お主も、その恐れは京に着くころには消え失せよう」

光秀の的を得た人の習性への考えに秀満は、心の中で唸るしかなかった。五十五年の生涯の間に幾多の出会い、命のやり取りが行われる戦、丁々発止の政事の裏舞台、そして名君と暴君の二つの顔を持つ織田信長のもとで生きてきた体験が、人の心まで操り見抜くと言う技を身につけたのだらう。感服し頭を下げた秀満は、光秀の目に宿る銀色の目の光に気がついていない。

夜明けが近づき、空が少しずつ青みがかってきた京の都。その京の四条西洞院、油小路、六角、錦小路にいたる広大な土地に、今にも迫りくる明智軍が目指す本能寺がある。そして、この本能寺に、この戦国の世を龍の如き勢いで昇ってゆき、今や天下すらその手中に収めようとする織田信長が逗留している。武田を滅ぼし、上杉を封じ込め、長宗我部に圧力を与え、毛利を追い詰めた彼の勢力は、もはやその完成形を築き上げたと言って過言ではなかった。周りに敵なし、奢りでも油断でもなく現実にそれを成し遂げてしまった彼は、まさに霸王とも言える。しかし、それほどの圧倒的な強さを誇る彼であったが、その器の大きさは裏腹に、家臣に対する苛烈さは口で表すことのできない、心の底から湧きあがる根源的な恐ろし

さを備えていた。

光秀の指摘したように、神仏に対する姿勢は、この時代ならば、いや、現代においても目を引くような異様な行為と言えるものである。それを躊躇いもせずに発想し、口にして、部下に命令を下す。科学の発達が進んでおらず、理屈ではなく観念が思考を左右される時代において、宗教と言うのは非常に大きな場を心の中に占め、物事の決断を大きく左右する。それほど大切なものを壊せ、殺せと言うのは、己の心を破壊するに等しいのだ。心の拠り所を自分自身の手で傷つける行為を家臣たちは、自分の納得のいく理由で心を補い、信長の命に従うしか生きる道はなかった。

観念でものを考える民と比べると、信長は理屈、つまり論理で物事を決めていく。これがよいという判断を下せば、その道にある思想や観念は全く気にしない。実をとるためには名は必要ない。権威も必要ない。必要なのは、そこにある物、目に見える確かな物しかありえないだ。そのような異物感を放つ信長が、他と違う存在感を大きくする度に、周りは戸惑い、反発するが、他者と根本から違う信長にとっては、敵とは思わくから違う故に、形式を伴う戦いが成立しない。信長にとって戦いとは、自分の道にあるものでしかないだから、取り除くだけと言う考えがある。だから、手段を選ばず相手を滅ぼし、容赦もせず、信じがたい作戦すら可能にする。まさに、戦乱の世を一つにまとめるために時代が必要とした異端である。

その信長も眠っている時は、一人の壮年の男に過ぎない。この男が見る世界、そして口から発せられる言葉。それが世を動かすとともに、世の中の何かを破壊していくなど、信じがたいものである。静かな寝息を立てながら深い眠りの中にいた信長だったが、突然目を見開いた。信長ともあろう者が悪夢にうなされ、寝具を跳ねのけ飛び起きることは考え難い。しかし、先程まで眠っていた人間とは思えないほどに目は爛々と輝き、眠気などは一切感じさせない。信長は音もなく寝具から抜け出すと、部屋の隅に行くと桐の箱を引っ張り出し、中から茶器を取り出し、それを恍惚とした表情で見つめ

ていた。その顔は、家臣に恐怖を与える男とは同一人物とは思えないほどの変わりようで、一種の病的とも思えるとりつかれたような表情を浮かべている。

「美しい……」

普段、家臣や家中の者に対して見えることのない恍惚とした表情、甘い口調は、魅入られている人間そのものである。

茶器狂い、今の見方で言えばそうであろうが、当時の価値は一国一城に相当するものであった。そして、茶器にそれほどまでの価値を付与したのが、まさに信長であった。

元々信長は茶の湯に興味があつたが、リアリストであつた彼が、当初から芸術的価値に入れ込んだとは思えない。むしろ、そこに集まる人間から情報を交換し合う、一種のサロンとして考えていたのだろう。しかし、それなりの家柄に育つた者には、本物を見抜く目さらにはいかに現実主義者とは言え、物に宿る無形の魅力や価値に気がつくものである。程なく、信長も茶の湯の持つ魅力と価値、そして茶器の値打ちに気がついた。そして、それは上洛した時に大きな炎となつて燃え上がった。

茶室に集まる人々は、政治の中枢に関わる者、物流を一手に握り富を築く商人など、世の中を動かす地位にいる人物のなんと多いことか。そして、そこで飛び交う情報がどれだけ高度なものかを、信長は天性の才覚で見抜き、これを掌握することの重要性を認識した。まず、茶の湯のブランド化、ステータス化に手をつけ始めた。茶の湯接待の主権を家臣に許可制にして与えた。当然関心は高まる上、取り上げられると一層したくなるのが人間の性。こうして、茶の湯はさらに洗練され、価値を高めていく。そして、そこで使用される茶道具の価値も高騰する。次第に、それは道具としてではなく、芸術性と言う目に見えぬ付加価値を際限なく上げていき、国よりも茶器を欲しがる武将まで現れる始末であつた。信長は、如何に

自分の勢力が拡大していつても、家臣が論功を上げるほど、自分と与えられる土地がなくなるのを予期していたのだろう。武士は地位と土地を得ることを求めて主君に仕え、戦に邁進する。その価値観を壊し、物質的なものではなく目に見えぬ無形の価値を論功にするという画期的な発想を生み、それを現実の物にした。

しかし、自分で構築した新たな価値観に信長自身が飲み込まれるのには、それほど時間がかからなかった。名物狩りと呼ばれ、天下の名器ありと聞けばすぐに使いを出し交渉するのだが、相手にしてみれば断ればどのような結末が待っているかは、信長の性格を考えれば火を見るより明らかである。形ばかりの話し合いで、信長は欲しいものは強引に手に入れていった。行きつくところまでいくと、三大名器を揃えようと松永久秀にその一つを譲るように言ったが、彼は茶器に火薬を詰め爆死するという前代未聞の顛末を迎えている。このように、茶器に取りつかれたのは事実だが、茶器の価値を高めたことにより、茶器の收拾が天下を掌握することにもつながっていったのである。

信長は、まだ世も明けぬ内から、持ち込んでいた茶器を取り出し見入っているのである。自分の権力の象徴、そして物欲の権化であるそれを見つめる様は、やはり異様と言えは異様である。権威を恐れぬものが、無形の価値や美にとり憑かれているのは、矛盾を抱え奇妙であった。

「美しい。こうやって日に一度は眺めぬと、落ち着かぬわ」

自らのコレクションを眺め、恍惚とした表情で満足感に浸ると、精氣を得たという様子で再び茶具を慎重な手つきでしまい込み、厳重に保管した。何年も前から、朝になり目を覚ますとこうやって鬼気迫る様子で包みを開け、うっとりとした様子で茶器を眺め、目覚めたときは打って変わった生き生きとした様子で茶器をしまい込むという、人知れぬ習慣が信長の日課となっていた。

まさに、一日の始まりに体の中に魂を吹き込まれたかのようになった信長は、早朝から快活な動きを始めた。まだ、寺は静まり返っているが、すっかり目が覚めた信長は用を足そうと廁へ向かった。霧が濃く、六月だが少し肌寒さを感じる外の空気であった。廊下の外れにある川やまであと少しと迫ったところで、後ろから誰かが廊下を走る、騒々しい足音がした。この早い時分から何事だと癪に障った信長は、どなりつけようかと思ったが、それを制するが如く矢のような声が耳に飛び込んだ。

「殿、お伏せ下さい」

家臣の鬼気迫る声に、信長おただ事ではない何かを感じ、言葉に従って身を伏せようとした瞬間、肩に衝撃が走り、壁に叩きつけられてしまった。そして、すぐに鋭い痛みが走り肩口を見ると、長い矢が肩口に深々と刺さっていた。さすがの信長も、いきなり早朝に矢を射かけられるという情う今日を飲み込めずにいたが、本能寺の自分が逗留していることなど、京にいる者や家臣も知っていることだ。そこに矢を射かけてくる者となると……。

そこに、他の家臣が駆けこんできた。信長は、湧きを抱えられて部屋の中に引きずり込まれていた。追い討ちをかけられるのを恐れてのことだ。矢を抜き取られると生温かい血が流れるのを感じたが、信長は眉一本動かさず手当てを受けていた。そこに駆け込んだ家臣が、息を切らせながら膝をつき報告をする。

「お館様、一大事にございます」

「わしに矢を射かけるなど、確かに尋常ではないな。して、如何したのじゃ」

「寺のまわりを尋常ではない兵が囲んでおります。霧に隠れてすべては見ませぬが、百、二百ではありませぬ」

「容易ではない事態だな」

現実主義である信長にしてみれば、この事態を悲観するという概念はない。自分に弓引く者が包囲している、ただそれだけのことである。そして、その事態に自分がどう立ちまわるか、それしか考えない。

「泊っているものをすべて叩き起こせ。この寺には、弓、刀なども貯蔵してある。全く手の打ちようがないわけではない。まず、敵が誰かを調べよ」

「はっ」

寝静まっていた寺がにわかにあわただしくなり始める。それと共に寺の周辺も騒ぎだしてきた。信長は五十を目前に最大の難関を迎えようとしていた。それをが超えられる難関かどうかは、まだわからない。家臣達は弓や刀を持ち運び、出来る限りの武装を始める。信長も、大弓を携え、床には刀や槍を突き刺し、臨戦態勢を整えていく。

そこに外の様子を探っていた家臣が戻ってきた。その顔面蒼白な湯オスは、粗さなる悪い知らせがあることを如実に物語っている。

「お館様、一大事です」

「それはわかっておる。このバカげたことを企てたのはどこの誰かが知りたい」

「それが、……、外にたなびく旗は桔梗の紋。……、明智様でございます」

「光秀だと。……、あ奴、二万の軍を率い、わしは京に丸腰同然で本能寺を宿をとることを知って、引き返してきたな」

「お館様、まだ、完全に囲まれたわけではありません。女衆にまぎれて逃げることもできます」

「光秀が、そのような逃げ道を作るはずはない。わしは、誰よりもあの者の頭も胆力も知っておる。知っていて、このような有様とはな。だが、相手が光秀なればこそ、もはや勝ち目はない。是非に及ばず。わしに勝ちはないのだ。逃げたいものは逃げても構わぬ。後は、死に方の問題じゃ」

「お館様……」

「泣くしかできぬなら、目の前から去れ。犬死にするよりなら生きる道もある。わしは、辱めを受けて生きるくらいなら、織田信長らしい死を迎えよう」

信長はそう言い、一旦寺の中に去っていった。もうすぐ、明智軍は圧倒的な兵力で攻め入って来る。勝ち目は全くない。家臣たちの前では覚悟を決めたように見えた信長の顔絵だったが、奥に引き下がり周りに人がいなくなると、口元を歪ませ、別人のような表情と声を上げた。そう、あの茶器に見入っていたあの時と同じように。「光秀、か。あ奴の心は読めなかったな。こしやくな真似をしてくれる。だが、これしきの事で死なぬ。そして、捕まらぬ。まだ、こちらには打つ手がある……」

まるで、信長ではない何者かが信長の声と口を使って喋っている。そうとは思えなかった。そして、その目は金色に不気味に輝いている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7417x/>

---

傀儡と傀儡子

2011年10月25日21時59分発行